
主かそれ以外の誰かへ

六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主かそれ以外の誰かへ

【Nコード】

N6119W

【作者名】

六

【あらすじ】

祈る、ってことをよく考える。

クリスチャンの家に生まれたけれどもクリスチャンではない「私」は、信仰と祈りについて頭を悩ませていた。が、それはともかく、天然の友人・モトに振り回されっぱなし。話したこともない男子を好きだという彼女は、いったいどうしたいのだろう？

自サイトThe fastened winds (http://666snowwing.web.fc2.com/frame.html)にも置いてあります。

祈る、ってことをよく考える。

現代社会の時間に山田先生が「宗教っていうのはもともと、死んだらどこに行くのかってことから始まったんだ」ってちょっと緊張したみたいに言ったのを覚えている。現代社会の授業はいちいち山田先生の語り口が面白くて、「マクドナルドは全世界を支配しようとしている！ 騙されてはいけない！ でもポテトうまい！」とか言っつてよく笑う、そんな授業だったのに。

それから「君たちはひよつとしたら宗教なんて入ってる日本人いない、いてもそれはアヤシイ宗教だ騙されてるんだって思ってるかもしれないけど、意外と近くにあるもんだよ。いまこの教室にだって、たとえば創価学会の人は多分何人かいると思うし」と続けた。あー、そういうことね。はいはい。下手なこと言えないんだよね。先生って大変だ。

山田先生、そんなこと気にしなさそうなのにな。

「おっかしいねえ、山田せんせい」

ってモトが資料集の陰に口を隠して言う。「なにが？」って私が返すと、「急に喋り方変わったちゃってさあ。おっかしい」とまったくすくす笑った。

「ま、しよーがないんじゃない？ しゅーきよー、だし」

「まあ、ねえ」

それでもモトは何がおかしいのかくすくす笑い続けた。

そう、祈る、ってことをよく考える。

私は一応、キリスト教徒である　と、言えば嘘になる。両親と姉がそれなりに信仰心のあついキリスト教徒のだが、私は違う。両親は私が違う道に進むならそれでもいい、と考えていたようで、幼児洗礼もしなかったらしいし、私が「やっぱなんか違う気がする

から洗礼はちよつと考えさせて」と言つたときも無理に説得しようとはしなかつた。

かといつて全く信仰心がないというわけではない。お寺や神社にお参りするのとはなんとなく 信仰心からというよりは慣れから 抵抗があるし、お守りのかわりに十字架を持っている。聖書の文句をいくつか暗誦することもできるが、それを心の底から信じているかと言えばそうでもない。

私は宗教を「信じる」という感覚がよく分からない。だって処女が妊娠するはずはないし、人間が生き返るはずはないし、進化論を否定するなんて馬鹿げている。けれどまあ、教えのひとつひとつには、なるほど、と思うときもある。

つまり保留中だ。

どーしよつかなー、って感じである。

祈るだけならいいんだけどな、と私は思う。信じる、じゃなくて、祈るだけ。よく神様仏様お願いします、なんていうけど、祈る相手がいないっていうのはちよつとさみしいものだし、なんていうか、説得力がない。お前この場だけ助けてもらえりやなんでもいいのかわよ！ みたいな。だから私は何かあつたときにお願ひする何かがある。欲しい。

ほら、外国の本なんて読んできると時々出てくるじゃん？ 主よ！
って奴。

ジーザス！

叫んでみたいものである。

ジーザス！

ところで門前の小僧よろしく（教会前の小娘？）聞きかじつたところによると、主は言つたそうである。

「わたしに向かつて、『主よ、主よ』と言つたものが皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。かの日には、大勢の者が私に、『主よ、主よ、わたしたちは御名によつて預言し、御名によつて悪霊を追い出し、御名によつて奇

跡をいろいろ行っただではありませんか』と言うのである。そのとき、わたしはきつぱりとう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』
というわけで私は多分天の国には行けないだろう。
ジーザス！

モトは私の家族がキリスト教徒なのを知っている。

「あんねえ、わたし、町田くんのこと好きなんだあ」

へらへら笑って言う。語尾がだらしなく伸びるのがこの子の癖だ。時々こいつの頭の中にはゼリーが詰まってるんじゃないかと思う。殴ったらびよよん、って音がしそうだ。

「まー……ちだくん……て誰だっけ」

と私は教科書を鞆に入れながら言う。誰もいなくなった放課後の教室は喧騒が遠く聞こえて私はこの時間が一番好きだ。

「3組のお、軽音楽部のお、ギター弾いてるう……」

「んー？ 最近茶髪にした子？」

「んん、茶色っていうかあ、赤っぽい感じでえ」

「あー、分かった。あれでしょ、キヨちゃんの元カレ」

「そうそう！」

「えー？ あんなの好きなの？」

「あんなのって。アヤちゃんひどいいい」

「だって私チャラ男嫌いだもーん」

「チャラくないよお」

モトはじたばた足を揺らしながら、「だってね、体育のときにね」と町田君のことを取りとめなく話し始めるが私はそんなものは聞かずにミンティアを取り出して口にほつりこむ。

「あー、モトにもちよーだい」

私は頷いて容器を振ったが、どうやらさっきのが最後の一個だったらしく、空になった容器が空気だけを吐き出した。

「あ、ごめんラスイチだった」
「ええーやつぱりアヤちゃんひどいいー」
「え、つつーかさ、あの人今彼女いないの？」
「いないよお」
「ふーん」
「いたらモト、困るもん」
「希望的観測かよ」
「でもでも！ いる気配ないもん、いつつ男の子と帰ってるし！」
「どうだろね」
「アヤちゃん、ひーどーいいー」
「つーかあんた、帰らないの？」
「ミンティアの容器をゴミ箱に捨てると、モトは椅子に前後逆に座ってがたがた揺らしてまたへらへら笑った。
「ちよつとでも学校にいたらあ、町田くんとすれ違つかもしんじゃないじゃーん？」
「あっそ」
付き合っていてられない。私は鞆を肩にひっかけて、「んじゃね」とモトに手を振った。教室を出たところでモトに鞆を後ろから思い切り引つ張られて、思わずよろめく。
「アヤちゃん冷たいっ、ばっかっ、おにちくー！」
「……おそらく鬼畜と言いたいのだろう。」
「おにちく言うな。おまえはゆとり世代か」
「ゆとりだもん、円周率3で習ったもん！」
「ですよねー」
「アヤちゃんには私を応援しようとか協力しようとかそついうのはないの？」
「他人の恋愛ほどもんどくさいものは無いよね……」
「隣人愛はどこにいったの！」
「だって私ハンパものだし」
「ううー、アヤちゃんがいじめるよおっ」

「誰がいじめた」

額にチヨップをひとつ。そのまま廊下に出ると、モトも付いてきた。いつのまにかリュックを背負っているから帰ることにしたらしい。

「つかあんなんで町田君なの？　なんか接点あったっけ？」

「……体育でえ、ラケットの箱運ぶの、代わってくれたりとかしてね？」

「ちょい待ち、当てるから。『あ、代わるよ』『ありがと』の他に喋ったことないでしょう」

「なんで分かるの！？　アヤちゃん、超能力者っ？」

「うぜーこの子超うぜえー」

「ねーえ、なんでー？　何でわかるのお？」

私は答えずにモトの頭を力を込めてなでた。モトはきよんとんとしてされるがままになっている。私はひとつ息を吐いてから、モトのこめかみを人指し指ではじいた。モトが大げさに痛がって「アヤちゃん、ひどいい」とわめくのをききながら、私は昇降口の段差を軽やかに降りた。

私はラブソングが嫌いである。

いつもあなたのことを考えてるとか、そばにいらなくても心はひとつとか、ありえなさすぎて笑えてくる。

どんなに熱い恋であろうとも、本当の意味で四六時中誰かのことを考えてるなんて無理なのだ。数学の問題を解きながら誰かの事は考えられないし、どんなに悩んでいたって食べすぎれば腹痛は襲ってくる。車とぶつかりそうになったらうわっあぶねーとは絶対に思うし、恋人がいがいがが受験戦争からは逃れられないのである。

……いや、恋人がいない負け惜しみではなく。本当に。

私が言いたいののはつまり、ラブソングは世界に「わたし」と「あなた」しかないように見えるのだ。そんな馬鹿な。実際恋すると

き、そのふたりだけではいられない。恋のほかにも悩みもあるはずだし、事務的な事だつていつぱいあるのに、「私のすべてはあなたのために！」みたいな態度が気に食わないのだ。

うるせー！　って感じである。自慢か！　じゃーお前それ以外考えるなよ、絶対考えるなよ、そんなんだつたら恋なんてしなくていいわ！　とかとか、考えてしまう。負け惜しみじゃなく。本当に。

小説とか漫画とかだと、けっこうそこに友情が絡んだりとか、仕事絡んだりとか、いろいろ入るのだけれども。

恋愛に限らず、何かが生活の100パーセントを占めることはまずない。

と、いう私の信条を壊すがごとく、現在のモトの100パーセントは恋愛で出来ています。

寝ても覚めても町田君。

ラケットからボールが零れ落ちるのは町田君のことを考えていたから。

車にひかれそうになるのを私があわてて止めても「あー、アヤちゃん、ごめんー」、それは町田君のせい。

授業中であてられれば何を聞かれたのか分からず何度も聞き返し、携帯を開けばアドレス帳を開いて町田君の名前（メアドを知らない）ので名前だけ登録してあるらしい）を眺めて過ごす。授業中寝ているのを起こすとへらへら笑って「町田君の夢見てた」……さいですか。休み時間はそそくさとどこかに出かけると思つたら3組の前を何も無いのにうるうるうるうる、うつとおしいことこの上ない。

ただでさえふらふらほわほわ、地に足がつかない感じの子ではあったが、ここまでくるとあきれれるのを通りこして本気で心配だ。

「モト」

「……あ、なあに？」

「奇術師魔術師手術中つて3回いつてみて」

「……あ、ごめん、何の話い？」

「なんでもない」

やっぱり聞いていなかった。私はふやけかけたコーンを一口かじり、モトの眉間から顎までを眺めまわした。色素の薄い瞳が空中をさまよい、一点にとまったと思えばどうやら私の背後のカップルを見ているらしい。溶けたアイスが手につくのも気にしていない。あとで手を洗わせなければ。

今日の朝、らしくもなく本気で心配になった私は、わざわざモトの家に行つて「町田君とのデートの予習にアイスでも食べに行こう」と誘った。「やだ、アヤちゃん町田君じゃないもん」と言われたが構わずむりやり引つ張つてみると、ひとりでまっすぐ歩くこともできない。いつにもまして上の空だ。

いったいどうして話したこともない相手のことをこんなに考えていられるのかさっぱり分からない。

「アイス、溶けるけど」

「あ、うん」

言われてようやく手にアイスがついていることに気がついたらしく、「ああー」と情けない声をあげて舌先で舐め、ようやくひと口目に手をつける。私はすでにコーンが半分無くなっているのに。

アイスを齧るモトの顔を見て、やせたな、とふと思う。ダイエツトしているのかもしれない。もともと手首も足も誰より細くて、ダイエツトする必要なんてどこにもない。これ以上やせたら体調を崩すだろう。

「モト、その後どうなの」

「どう、つてえ？」

「町田君と。なんか話したりとか、進展はあつたわけ？」

「アヤちゃん、ひどおい。あつたら報告してるよう」

「じゃああんた普段何考えてんの」

「町田君のことお」

「町田君の何？ 話したことも無いのに？」

「あのね、アヤちゃん」

モトが急にまじめな顔になるので、私も思わずアイスから口を離

して姿勢を正す。

「恋するとね、その人がいるっていう事実だけで何時間だって幸せになれるんだよ」

身を乗り出してモトの頭をはたく。「アヤちゃん、ひどいい」とモトが涙目になる。姿勢を正して損した。

「うわー何いまの携帯小説みたいな台詞……気持ち悪かったー……死ぬかと思ったー……」

いや別に携帯小説なんて読んだことないけど。偏見、ダメ、ゼツタイ。

「アヤちゃんは」

「んん？」

「モトのこと、嫌い？」

私は眉根を寄せて五秒間沈黙する。それから何事も無かったかのように携帯を開いて「あー見て見て、この間エリちゃんから面白い画像届いてそれがギャグセン半端ない」と言ってみた。

「アヤちゃん、ひどいい!!」
怒られた。

「モト、本気なのに！ アヤちゃんはいつもそうやって、そうやってえ」

「あーごめんごめん」

コーンの最後のひとかけらを口に放り込んでから見ると、モトは細い肩を震わせて私を睨んでいた。目元が赤い。

「モト、知ってるんだ、ミカちゃんたちがモトのこと嫌いなの」

私は意外さに少し眉を上げた。ミカちゃんたち、というのはクラスでも派手めな女の子3人組の事だろう。問題児ほど可愛い、という感じで先生たちに割と気に入られているが、女子だけになるとよくもまあここまで、と思えるほど様々な人たちの悪口を言う。多分私も言われているだろう。しかし、空気が読めなくて鈍いモトがそれに気付いているとは知らなかった。

「ミカちゃんたちがモトのこと嫌いなら、町田くんだってモトのこ

と嫌いかもしれない。でもアヤちゃんがモトのこと好きでいてくれるなら、町田くんだってモトのこと好きになってくれるかも知れなくて、だから」

私を見つめていたモトがどんどん俯いて、しまいには頭のとっぺんしか見えなくなったのを私は冷めた目で見ている。

モトは下を向いたままほとんど溶けたアイスを私に押し付けて、「帰る」と一言宣言して出て行った。

水色の液体が私の手のそばまで垂れてきて、あわてて紙ナプキンでコーンを包む。押し付けて、どうしろと言うのだ。少しはこっちの迷惑も考えてほしい。

否、考えるべきは私の方だ。

私は冷房で冷えた二の腕をこすった。はっきり言って私は優しくない。モトが泣いていようと何だろうと、だからどうした、くらいに思える。後悔して心配して電話してごめんの一言もあるべきなのだろう、多分。世のキリスト教徒の顔汚しだ。申し訳が立たない。

それよりも問題は、私が優しくないことではなく、優しくなるうとしていない事にある。

優しくするってどうやるんだっか、どうにも思い出せない。たとえばいまここで電話してモトに謝ったとして、その前の「後悔して心配する」というプロセスが抜けている。それがないと意味がない、ような気がする。よって電話はしない。つまり私は優しくしない。表向きだけなら出来るだろうに、優しくしようとしなない。心配して連れてきたんだから、最後まで面倒くらい見てやるべきだろうに。

以前姉に聞いたことがある。「何回お説教を聞いても分かんないんだけど、隣人愛って具体的に何すればいいの？」姉は答えた。「相手の事を思い浮かべて、あったかい気持ちを持ってごらん」。

全然具体的じゃない。

私は大根を切るにも何ミリ幅で切ればいいのか指示を仰ぐというのに。

「失礼、こちら座つてもよろしいですか？」

モトが戻ってきたのかと思った。

声の方に視線を向けると、小学生高学年くらいの女の子がさつきまでモトが座っていた席にちよこんと腰をおろしていた。ぶかぶかの茶色いキャスケット帽の下から大きな目と短めの猫っ毛が覗く。フードの付いたTシャツにデニムのショートパンツを合わせて、晒した手足はまつすぐに健康そうだ。そしてその顔は、モトによく似ている。

「姉がいつもお世話になっております。素子の妹の直子と申します」
「……………どうも」

声もよく似ている。しかし、モトと違って語尾まできっちり力を入れて喋るので印象が正反対だ。

顔も声もよく似ているだけに変な感じがする。

「また姉がご迷惑をおかけしたようで、申し訳ありません」

「はあ……………」

「ところでよろしければその姉の食べ残し、いただけませんか？」

私、ポツピングシャワー大好きなのです」

「はあ……………」

手渡すと溶けているのにも構わずに嬉しそうにかぶりつく。真面目な顔をしていたのが見る間にほころんで、年相応の笑顔になった。

「……………えっと、浅川さん？」

「ナオコかナオで結構です」

「……………ナオコちゃん」

「ちゃん付けは好きではありません」

「ナオ」

「何でしょう」

首をかしげて私を見る。見れば見るほど似ているので居心地が悪い。

「……………その、何でここに？」

そして何で私に話しかけたのか、さっぱり分からない。

ナオは真面目な顔で答えた。

「姉を尾行しておりましたので」

「……………」

モトの奴、なかなかエキセントリックな妹をもつてやがる。

「なぜかと言いますと、姉はあの通りの変人ですので他人様にご迷惑をおかけしてないかと心配だったのと」

「と?」

「探偵つてかつこいいと思われませんか?」

お前も十分変人だ、と言いたいのをぐつとこらえる。相手は小学生相手は小学生相手は小学生、と心の中で唱えて、「それで、何か用でも?」と聞く。それにしても、初対面の年下ってどういう言葉づかいすればいいのかわからないものだ。私は電化製品は説明書を見てから使う派である。

「いえ、姉が失礼をしたようですので謝罪をと思いました。愚兄が大変失礼をいたしました」

「いや、私が悪かった、です、し、えっと、はい」

しどろもどろに答える。あれ、私が悪かったんだっけか? そして愚兄つていうのは姉に対しても使うのか?

「いえ、どうせ姉のことですから微妙にずれたところで悩んだりあたたたり結局恋愛のことしか考えてなかったりしたのでしょうか」

「だいたい合ってる」

「やっぱり」

「あ、いや、合ってないけど」

「どっちですか」

「……………結局町田君かよ、とは思った」

「町田さんとおっしゃるのですか、今回の姉の想い人は」

想い人とは古風な表現だ。

「姉はなんとというか、恋多き女性でして」

「はあ」

「しかも一つ一つがあまりに真剣なので夕チが悪いと申しましよう

か、一点集中のめり込み型なもので、その方のことを考えすぎて交
通事故に遭いかけたこと数知れず」

「ナオはそこで言葉を切ってコーンのしっぽをリスかなにかのよう
に両手で持つ。」

「家族は非常に迷惑しております」

「まあ……うん、悪い人じゃないのは分かってるんで、アレなんで
すけど」

「言いながら、なんで私がモトのフォローをしているのかと不思議
に思う。」

「ところでその町田さんとはどんな方なのでしょう？」

「えー……っと。軽音楽部でギター弾いてて……運動も割とできて
まあそこそこ人気あって……うーん……」

「特徴を並べてみたところで人柄が全く立ちあがってこない。しか
しナオは納得したようにうなずいた。」

「なるほど、それで大体分かりました」

「え、何が」

「姉がその方を選んだ理由です」

「嘘」

「本当です。今まで姉は地味で大人しく、スポーツよりも勉強がで
きて、目立つことをしないような男性ばかりを好んでいました」

「へえ？」

「いわゆる草食系です」

「なんだかこの子の口から草食系とか言われても、「草食系の動物
は視野を広く持つために目が左右についています」と同じ意味に聞
こえる。」

「そして姉は中学3年生の冬にそういう男性にお付き合いを拒否さ
れておりました」

「フラれた？」

「そうです。しかもかなり手ひどく。人格を否定するようなことま
で言われていました」

「その場にいたみたいと言っね？」

「その場にいましたので」

「……その時も尾行してたの？」

「どうしてお分かりになったのですか？ 超能力者なんですか？」

「やばい、こいつらやっぱり姉妹だ。そっくりだ。」

「……続けて？」

「はい、だから、その真逆の人を選ぶようになったのかと」

「私はちよつと考える。「分からなくもないけど」人の好みってそんなことで変わるのかな。」

「もちろん姉に聞いてみないことには分かりませんが」

「まあね」

「姉は多分熱中するものがないと生きていけない人だと思うのです」
急に話題が変わった。目を上げると、ナオはいつの間にかアイス
を全て食べ終わり、指先を名残惜しそうにぺろりとなめていた。

「他の人が普通趣味や仕事や学業や、スポーツや絵画や料理などに
かける労力を、姉はどうしてだか全て異性に傾けるのです。姉は趣
味というものがないので」

「生活の100パーセントを入れ込んでしまう」

「そうです。だから振られるたびに毎回死んでしまうのではないかと不安になります」

「大げさな、と言いかけて思いとどまった。ナオの目は真剣そのものだった。確かに、あの入れ込みようなら無理もない気もする。」

「たとえば走れなくなったスポーツ選手みたいに、ってこと？」

「いい比喻ですね」

「褒められた。」

「私は心配なのです。けれど私がどうこうできる問題でもありません。だからお願いがあります」

「ナオはずいと体を乗り出した。大きな瞳が私をまっすぐ見る。ずっと年下の小学生にどうしてだか気圧されて、お願いの内容を言われる前に頷いてしまいそうだ。」

「姉を、どうか守っていたただけませんか」
ナオの声は頼みというよりも祈りに聞こえた。

祈る、ってことをよく考える。

祈る相手のいない祈りはなんだか説得力が無い。この場にいない誰か、超人間的な力をもった何か、それを信じることも普段から頼りにすることもなく都合のいい時にだけ訴えるのはその何かに失礼だ。

だがしかし however、信じていないかもしれないのに私は十字架を持つ。ミサに出る。時々は祈ったりもする。けれど時々分からなくなる。

私は何に祈っているのだろうか？

「アヤちゃん、十字架、でてるよお」
「あ。ありがとう」

モトに言われて、あわてて胸元にしまい直す。誰かに見られても普通のペンダントだと思われるんだろうけど、なんとなく気になる。なんとなくか、皆に引かれてしまうような気がする。ので、普段はワイシャツの内側にしまっている。

モトは昨日のことなど何も気にしていないように見える。ほっとしたと同時に、なんとなくイラツとする。卵焼きを八つ当たりのように噛み砕くと、卵の甘さが苛立ちを和らげた。

「町田くん、私服だとそういうのつけてるんだってえ」
「……多分キリスト教徒じゃなくて単なるファッションだと思うけど」
「ロックの人だもんねえ」

私は適当に頷きながら、多分、万が一告白したとしてもこの子はフラれるだろうな、と思う。いや、町田君が実は天然ほわほわが好きという可能性もなくはないが、元カノのタイプからして、モトはおそらく好みの対極だ。しかも話したこともなく、下手をすると名

前も知らない女子に何か言われても、普通の男子なら気持ち悪いと思うだろう、多分。

万が一「告白しようかなあ」とか言い出したら止めなくては。ナオの言葉が頭の隅をよぎる。多分守るといふのはそういう意味だ。多分。

「あ、そうだ、アヤちゃん」

「なに？」

「今日は部活、先に行つててくれない？ ちょっと用事があつてえ」

「ん、はいはい」

用事つて？ とかは聞かない。どうせ町田君のクラスの前をうろするなり、町田君の友達の子達の友達あたりと話をするなり、だろう。この暑いのにご苦労なことだ。いや、部活するほうが暑いからひよつとしてサボりなのか？ どちらにしても、部長は割とルーズな人だから理由は聞かれないだろう。

こうして余計な事を考えている間に、私はモトの言葉を聞き逃した。

「から、行動しないとって」

「……ん？ ああ、うん、そうだね」

適当に答えると、モトは少しの間、驚いたような戸惑うような表情をその大きな瞳に浮かべてから、「アヤちゃん、聞いてなかったでしょ。ひどいい」と薄く笑った。

私はなんとなく気まずく視線をそらし、頬杖をついて窓の外を見た。

午後暑くなりそうだった。

モトは部活に来なかった。

部活が終わった時には長い夏の日が傾いて、西向きのグラウンドが真っ赤に染まっていた。日焼けでちりちりする首の後ろをぬぐってから、部室へと足を向ける。一刻も早く着替えて帰りたい。

制服に着替える前に携帯を開くと、「新着メールが1件あります」という表示があった。モトの「やっぱり休みます」メールかな、と思いつながら開く。

『件名なし』

昼間も言ったけど、やっぱり町田君に気持ちを伝えることにしました

ずっと迷ってたんだけど、アヤちゃんがやめた方がいいって言うたらやめよう、って思って

でも聞いてなかったとはいえ、アヤちゃんがそうだねっていつてくれたから、勇気がでたんだ

がんばってくるね！

応援してくれるとうれしいな』

絵文字満載なのと日本語が微妙に苦手なのはいつものことだ。あ、と私はため息をついた。送信時間は16:18になっている。今は18:35、時間が経ち過ぎている。

時間が経ち過ぎている？

私の中で何かがはじけた。

私は何を言い訳しているんだ？

タオルを放り出して部屋から飛び出す。「アヤ、どしたのー？」という声が背後から聞こえるが聞こえるだけで意味を理解するのに10秒くらいかかった。頭がうまく働かない。

ナオは「姉をどうか守っていただけませんか」と言った。モトは私を信用してそして勝算のない告白に挑んだ。私にはナオとの約束と無意識にはいえ背中を押した責任がある。責任？ それも言い逃れた。私の内側を揺らしているのはナオの声だ。

『振られるたびに毎回死んでしまうのではないかと』

まさか死にまではしまいという思考と心臓の鼓動が重なってどち

らを信用していいのかわからなくなる。

私は優しくないし優しくなるうともしていない。だけど認めよう、私はモトに傷ついてほしくない。

暖かい気持ちを持って姉は言った。それがどういうものか私には分からなかった。これが暖かい？

そんなことはない。私は私の心の安寧のためにモトに傷ついてほしくない。自分の心の安定のためだ。断じてモトに対する友情が厚いとかそういうわけではない。大切なのは、と私は思う。

大切なのは私が今モトのところに走っているという事実だ。

モトはどこにいるのだろう？　いくらなんでも体育館裏に呼び出すなんてことはないだろう。校門へ歩いて行く人に逆行して走る。

昇降口のドアで野球部の男子にぶつかりそうになる。上履きを履き替えるのがもどかしい。スニーカーはそこに置いたままにする。見るべきは3組か？　それとも自分のクラスか？　走らなきゃ走らなきゃ走らなきゃとそれだけが頭の中をぐるぐる回って息が切れる。

私は祈る。モトが思いとどまってどこかでぼうっとしていますように。あるいはフラれてもそれほど傷ついていませんように。私は祈る。ジーザス！

ナオのあの声は、「姉をどうか守っていただけませんか」と言ったあの声はどうして祈りのように聞こえるのだろう。そして彼女は誰に祈っていたのだろう。私に？　あるいはどこかの何かに？　それは失礼なことだろうか？

失礼ではないと私は結論を下す。あのときのナオが、私が今祈っているのと同じ気持ちだったなら、失礼とか丁寧とかそういうことは問題じゃないと私は本能的に知る。説得力？　そんなもん知るか。大事なものはナオが私に頼んだという事実と、私が今モトのことが心配だという事実だ。　祈る相手など問題ではないのだ。私が主を信じていようと信じていまいと、それは全然、何一つとして、構わないのだ。

ジーザス、と私は呟く。廊下を走る。世界史の先生にぶつかる。

ジーザス。どうか。

息が切れる。息が切れる？ このくらいで切れていてたまるか。言葉が乱暴になる。

ジーザス。ああ、誰か。

まだ間に合うだろうか？

主でなくてもいい、とわたしは思う。ヴィーナス、あの子に祝福を。お釈迦様、あの子を救って。マホメッドは神様じゃないんだっけ？ 誰でもいい、ジーザス、誰か。

あの子を見捨てないで。

モトは自分の教室にいた。所在なさにたたずんで、困ったように首をかしげて私を見た。窓から差し込む西日のせいで表情がよく見えない。

ジーザス。

「どうだった」

声が震える。ヴィーナス。この子を助けて。

モトはへらっと笑って、「振られ、たあ」と一言、言った。

私はモトの肩を掴んで引きよせて、ジーザス、と呟く。彼女は私の肩に額を乗せてじっとしている。私は口の中で聖書の文句を唱えて、首にかけていた十字架を取って彼女の首にかけた。

「くれるの？」

彼女が聞く。私はだまって頷く。彼女は笑って「ありがとお」とまたへらへら笑う。

「ロックバンドのひとみたい、だねえ」

と言って、彼女は崩れ落ちて泣きだした。

私は祈る。ジーザス、ヴィーナス、お釈迦様、アツラー、八百万の神様、だれか、どうか、この子を。

私は十字架が彼女を守ってくれる事を信じる。十字架がもつ力でなくてもいい、十字架を象徴とする何かがこの子を救ってくれると

信じる。信じる相手など、祈る相手など、問題ではない。私はモトの頭を抱きしめる。

ほとんど沈みかかった夕日が私の背中を焼く。私はモトを自分の影の中にかばう。モトは肩を震わせて泣いている。私は顔を上げて、息を長く長く吐く。

私は祈る。私は祈る。きっとナオも祈っている。

ジーザス、それともそれ以外の誰か、この子を助けて。

(後書き)

いかがでしたでしょうか。

よろしければサイト The fastenteds windows)
http://666snowwing.web.fc2.com
/frame.html) もご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6119w/>

主かそれ以外の誰かへ

2011年9月12日03時20分発行